

《書評》

P. ボーモント他  
『中東：地理学的研究』

Peter Beaumont, Gerald H. Blake, J. Malcolm Wagstaff:  
*The Middle East: A Geographical Study.*  
Halsted Press, New York, 1988.

内 藤 正 典

I

本書は、地理学にかかわるいくつかの主題から中東を包括的に扱った書物であり、大学での講義を念頭においた教科書として編集したものと思われる。3人の著者は、ボーモントがウェールズ、ブレイクがダラム、ワグスタッフがサザンプトンといずれも英国の地理学者で、ボーモントとブレイクの2人は、英国における中東研究——とりわけ地理学にとって——の中心であるダラム大学の出身である。

本書の構成は、以下の通りである。イントロダクションでは、中東の統一性と多様性、地政学的重要性、中東に関するイメージと現実、中東への視角といった項目が並び、中東への地理学的接近の方法が示されている。このうち、統一性と多様性の項では、「乾燥」という気候条件によって特徴づけられる地域であるという点を指摘しながらも、昔ながらの環境論・風土論的説明は、ほとんどおこなわれていない。むしろ、中東地域に統一的な性格を与える要素としてイスラームに注目し、この地域全体が、Dār al-Islām（イスラームの家＝イスラーム世界）としての統合性をもちうることを指摘している。

地政学的重要性というテーマは、西欧の地理学者による中東地域の概説には、必ずといってよいほど登場するが、ここでは、主に第二次大戦後の米ソ双方の軍事ブロックの接点になっていることが強調されている。本書でタイトルに「地政学」を掲げたのはこのイントロダクションだけだが、第10章に「ポリティカル・マップ」という章があり、従来他書であつかわれてきた<sup>(1)</sup>「中東の地政学」は領土問題を中心にそこで扱われている。

中東への地理学的アプローチの方法を示したこのイントロダクションで注目すべきことは、

「イメージと現実」と「パーセプション」の項であろう。そこでは、従来の西欧世界における中東の理解が、アラビアンナイトのイメージをステレオタイプ化したものに偏りがちであったことを指摘している。オリエンタリズムという表現は用いられていないものの、永らく中東地域にまわりついてきたイメージが西欧世界で作られたものであったという批判がこめられている。そして、現代の中東について地理的なテーマとして、ツーリズムの振興や過剰都市化、そして急激な工業化にともなう環境問題などをあげ、むしろ他の第三世界諸地域に共通する問題の存在に眼を向けている。

続く第1章から21章については、逐一紹介することを避け、各章のタイトルだけをあげるにとどめる。

1. Relief, Geology, Geomorphology and Soils
2. Climate and Water Resources
3. Landscape Evolution
4. Rural Land Use: Patterns and Systems
5. Population
6. Towns and Cities
7. Problems of Economic Development
8. Industry, Trade and Finance
9. Petroleum
10. The Political Map
11. Tradition and Change in Arabia
12. Iraq—A Study of Man, Land and Water in Alluvial Environment
13. Agricultural Expansion in Syria
14. Religion, Community and Conflict in Lebanon
15. Jordan—The Struggle for Economic Survival
16. Israel and the Occupied Areas: Jewish Colonization
17. The Industrialization of Turkey
18. Iran—Agriculture and its Modernization
19. Egypt—Population Growth and Agricultural Development
20. Libya—Oil Revenues and Revolution
21. Conclusion

さて、上にあげたように、第10章までの前半は主題別、そして後半では国別に農業開発、工業化、エスニシティなどのテーマを論じている。前半の構成をみると、地形、気候、水資

---

(1) たとえば, Drysdale A. & Blake G. (1985): *The Middle East and North Africa, A Political Geography*, Oxford University Press, New York.

源といった自然地理学的な内容が冒頭にあり、ついで土地利用、人口、都市論、経済開発、政治、石油資源など人文・社会科学的内容となっている。この章だてをみる限り、伝統的な地誌を扱う書物と何ら変わるところがない。総論的、系統的な内容について各国別の地誌を並べている点も従来からよくみられる構成である。

その保守的な構成にくらべて、内容は現代の中東をめぐるさまざまな問題に焦点をあてたものとなっている。たとえば、人口論のなかで国際間の人口移動をとりあげ、近年ヨーロッパ諸国で顕在化しつつある外国人労働者の増加にともなう社会問題に触れている。概説書という性格からその分析は希薄だが、アジア・アフリカからヨーロッパへの労働力移動の動向が簡潔にまとめられている。

第7章の経済開発の諸問題では、農業開発に関して、都市人口の増大による食糧増産の要求が高まっているにもかかわらず、個々の農民レベルでは、インセンティブをもたないゆえに粗放的な農法からの転換が困難なことを指摘している。また、大規模な灌漑計画をとまなう農地開発や商品作物栽培の集中が、塩害などの環境問題に結びついていることにも触れている。これらの問題は第4章の農村の土地利用の項目で取り上げた土地所有の不平等と農地改革の難しさ、そして伝統的な村落社会に展開される *peasant economy* の保守性といった特色をふまえて論じられている。とりわけ農民たちが、技術革新による収益性を必ずしも優先しない、——言い換えれば、資本主義システムのなかに無定見に取り込まれるとは限らないこと——を単なる後進性の表れととらえずに、中東の村落社会の組織や、そこに機能するイスラームの意味などを含めて中東の社会的コンテクストのなかに読み解いていこうとする姿勢は評価できる。さらに、現代の農業問題を農村のみの問題として把握するのではなく、無秩序かつ大規模な都市への人口集中との関連をも視座に入れて、より大きな空間時スケールのなかでの地域間格差として論じている点でリアリティに富んでいる。

工業開発については、産油国と非産油国の間の格差の拡大を指摘しているが、前者においても巨額のオイル・マネーが、自国や域内非産油国の開発投資には必ずしも向けられていない点を問題としている。また、イラン・イラク戦争やパレスチナ問題、レバノン問題に代表される地域紛争が、中東の経済的ポテンシャルを不当に引き下げていることを指摘している。しかしながら、これらの問題点を中東地域に固有の問題としてみている点に、——本書の概説書としての性格を考慮したとしても——不満が残る。確かに産油国の投資動向は、ごく少数の支配層に富が極度に集中していることを反映している。しかしながら、オイル・マネーがヨーロッパの金融市場に流入し、さらに NIES 諸国への投資などに向けられたことを考えれば、これは世界資本主義システムの一つの動向を示すものである。中東地域内の紛争にしても、ソ連を含めて先進国の兵器産業に多大の利益をもたらしたことは疑いようのない事実である。さらに、イラン・イラク戦争が、OPEC 諸国の協調体制を崩し、原油価格の引き下げに貢献したことは、非産油国の先進国の経済成長を堅持させるうえで、大きく寄与したことは言うまでもない。これらをふまえて、経済開発に関わる諸問題は、たとえば南北問題の一環として考えるというように、より広い空間的視野のなかに把握する姿勢が求められよう。

中東の政治をめぐる第10章では、基本的には領土問題に焦点をあてている。前に触れたように、ここでも大国の政治的影響力と軍事ブロックの問題など地政学的なアプローチは注意深く避けられており、主として中東諸国の領土問題が取り上げられている。章のはじめに中東の現代史を簡潔にまとめ、今日の領土問題が、列強によるオスマン帝国分割の過程で生じたことを指摘し、パレスチナ問題の発生をそのなかに位置づけている。しかしここでも、具体的にサイクス・ピコ協定やバルフォア宣言によって分割が行われたという事実が述べられているにすぎないのであって、歴史をいかに解釈するかには言及していない。サイードの言う「地理学のもつ倫理的中立性」<sup>(2)</sup>のひとつの表現をここにも見ることができる。

後半の国別の各論は、いくつかの国を取り上げ、その国についての地理学的なテーマを論じている。どういうテーマを取り上げるかという方針は明示されていない。したがって、この国を扱うならもっと他のテーマがあるのではないか、という疑問は評者にも浮かんだのだが、それならばオルタナティブを示せばよいのであって、本書の価値を損なうものではないだろう。一応述べておけば、アラビア半島、とくにサウジ・アラビアを扱った *Tradition and Change in Arabia* では、相変わらず伝統的生産様式としての遊牧を強調しすぎたきらいがある。産油国としての経済開発とそれともなう外国人労働者の流入や、80年代以降の原油価格の低落傾向のなかでの開発政策の転換などは、ほとんど取り上げていない。また、シリアの農業開発を扱った *Agricultural Expansion in Syria* では、農地開発の過程とその停滞の原因を主として環境要因から説明しようとしている。しかしながらシリアの場合、たえず水資源確保という自然的要因に規制される面はあるものの、実際に耕地面積の伸び悩みを引き起こした原因は、むしろ農政にある。とくにエジプトの改革を模倣した農地改革や、政府の支持基盤としての性格が強化された協同組合のありかたなど、農村と農業とをめぐる社会・経済的分析がほとんどみられないのは残念である。

一方、ヨルダンを扱った *The Struggle for Economic Development* などは、この国の存続のための水資源開発、農地の拡大を急務としている点をよく説明している。ヨルダンの場合、伝統的農業と近代化との矛盾が表面化する以前に、援助に依存している脆弱な経済基盤をどうするかの問題であり、その点で古来からの灌漑農業、乾地農法の伝統をもつシリアやエジプトとは問題の所在が異なるのは言うまでもない。

## II

以上いくつかの問題点を指摘したが、本書は中東という地域に関する地理学的接近のきっかけを与える本としての価値もっている。最後に、なぜこのような教科書的書物を書評の対象にしたのかを述べておきたい。一言で言ってしまえば、日本の地理学の現状と比べれば、

(2) エドワード・サイード(1978)板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳(1986)『オリエンタリズム』、平凡社、221ページ。

「経験」の学としての地理学の層の厚さの違いをよく知ることができるからである。本書の内容や評者のコメントなど中東の地域研究に携わる研究者ならば、あたりまえのことばかりである。しかし、日本の地理学者は、「外国」の「地誌」を語るにあたって、よりどころとする視角も視座ももっていないことが多い。中東だけではない。朝鮮半島や中国、東南アジアにしても同様である。日本の地理学者が、本書のように、たとえ概説であっても特定の地域に取り組んだ本を世に問うたことはない。近年、海外学術調査へ参加する機会が増えてきたために、地理学者による海外レポートは増えている。しかし、それらの多くも、「なぜ」そして「どういう視角で」その地域についての地理学的研究を指向するのか、その理由に答えているものはほとんどない。「そこに山があるから」式の研究が増えたところで、exceptionalism 批判の対象になる程度であろう。もちろん、経験主義を無批判に認めようというのではない。しかし、経験の蓄積をいかそうとしないのも問題である。

戦後日本の地理学は、海外領土を失ったこともあって、外国研究から遠ざかってしまったことも、その一因には違いない。しかし、60年代以降、とりわけ多くの地理学者が勝手に革命だと思い込んできた計量革命以来、中途半端な理論指向が地理学に蔓延したことが、地理学の分野からの地域研究を大きく停滞させる重要な要因となった。

たしかに、地理学、とくに自然地理学を除いた人文系の地理学は、竹内のいうように独自の体系を示してこなかった<sup>(3)</sup>。体系化を求める傾向それ自体はあったが、その結果は欧米の理論やモデルを輸入するにとどまったと言うべきであろう。しかし、地理学者としての自己に内在する問題意識が希薄なままに、体系化への欲求だけが先行した感はいなめない。私見によれば、戦後の日本の地理学は、むしろ体系化の幻想と科学主義の呪縛にとらわれてきたと考えている。とくに「計量革命」の導入以来、科学的な地理学を創り上げるために、地域は理論検証の場としてしか省みられない傾向が強まった。しかし同時に、本来の意味での演繹科学を目指した研究者は少数であり、多くは理論に足を引っ張られつつ、現実の地域にも眼を向けてきたのではないだろうか。その中途半端さゆえに、現代世界をめぐる様々な問題発生場としての地域は、地理学研究の自己目的とならず、したがって、地域研究への地理学的方法も、十分な検討をへないまま今日にいたったのである。本書は、経験科学であることの是非は別として、地域自体を目的として研究を進めてきた英国の地理学伝統の一つの所産である。地域研究、なかでも第三世界をめぐるそれが、様々な意味で求められている現在、日本の地理学者による貢献は、理論、ケーススタディともにあまりにも少ないと言わざるを得ない。

---

(3) 竹内啓一(1986):ゲオポリティクの復活と政治地理学の新しい展開,一ゲオポリティク再々考,一橋論叢第96巻,第5号,51ページ。

**BEAUMONT P., BLAKE G., WAGSTAFF J.:**  
***THE MIDDLE EAST, A GEOGRAPHICAL STUDY***  
**Halsted Press, New York, 1988**

Masanori NAITO

This book deals with various subjects concerning the modern Middle East from geographical view points. The authors are British geographers, and Beaumont and Blake have their academic orientation at Durham. It is well known that department of geography there had a great predecessor, Prof. W. Fisher.

This book is succeeded the heritage of his book, *The Middle East, a Physical, Social and Regional Geography*, 1950, however, it presents several contemporary geographical approaches. For instance, for rural land use, the authors seek factors which cause less development in contradiction between conservative rural society and rapid modernization. In the other part of case studies for each country, two chapters, *Industrialization of Turkey and Jordan* and *The Struggle for Economic Survival*, accurately describe the problems which the two countries are facing through the process of state building.

The other subjects such as ethnic conflicts in Lebanon and the Jewish colonialism in their occupied areas also show the contemporary socio-political problems oriented in the divide and rule policies of the European power in the late Ottoman period. This book include many suggestive approaches for geographical studies in the Middle East.